

乱世を駆ける者 未来
を歌う者

妄想族

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある夜に、IDOLISH7が番組収録を終えて寮に戻ると、寮の前には謎の男が立っていた。その男は「鶴丸」と名乗り、「マネージャーに会わせてほしい」とIDOLISH7に頼んだ。その日から、紡マネージャーの周囲で奇妙なことが起こり始め……
「審神者」と「刀剣男士」の秘密に触れた彼らは、何を思い、何を歌う？

※この作品は、「紡ちゃんがもし審神者だったら？」という、n番煎じネタクロスオーバー小説です。

目次

第1話 「謎の男」	1
第2話 「深まる謎」	15
第3話 「襲撃者と守護者」	20

第1話「謎の男」

それは季節が秋から冬へと移り変わり始めた頃の、とある日の夜の出来事だった。

IDOLISH7のメンバー全員は今日の収録を終えて、彼らの寮への帰り道を歩いているところだった。

「みんな今日もお疲れ！」

三月が帰り道を歩きながら、疲れを感じさせない程に明るい声で言う。ユニット結成当初は苦労も多かったが、七人は今や大人気アイドルとして多忙な毎日を送っている。今日の仕事は七人全員が集まったの冠番組の収録だった。そして無事に収録を終えた彼らは、そのまま七人で帰ることにした。

大和は収録が終わってワイワイと騒ぐ仲間達を眺めていた。今日の収録での失敗（といつても些細なことなのだが）について、一織と陸が相変わらず喧嘩をしている。しかし二人共どこか楽しそうだ。そんな二人の横では、女性の姿を見つけたナギが思わずガールハントに繰り出そうとしている。そんなナギを三月が必死に止めている。環は帰り道の途中にあるコンビニで買った大量の「王様プリン」が入ったレジ袋を大事そうに抱えている。壮五は「プリン以外にもちゃんと食べないと！」と、心配そうに環へ声を

掛ける。

(楽しそうなことだ)

そうこう騒いでいる内に寮が見えてきた。大和は寮の方に顔を向ける。そして「あれ？」と声を漏らした。

「大和さん、どうかしましたか？」

陸と喧嘩していたはずの一織が、一番に大和の声に気が付いた。一織の声に釣られて、他のメンバーも大和を見た。一齐に六人からの視線を浴びることになった大和は、何だか居心地が悪い気分もしたが、彼らの疑問に答えるために人差し指を指して言った。

「あいつ、誰だ？」

大和が指差した方向に六人は視線を向けた。

寮の前には一人のスーツ姿の男が立っていた。男はこちらに背を向けて立っている。だから後ろ姿しか分からない。分かることは、男の白銀の髪が美しく煌めいていることと、細身の身体が均整にとれていることだけ。

IDOLISH7は見覚えの無い男に首を傾げた。自分達の寮の場所を知って押しかけて来たファンだろうか。それとも別の用件があつて尋ねて来た者だろうか。大和は取り敢えず、男に声を掛けることにした。

「すみません。どちら様？」

大和に声を掛けられた男は七人の方へ振り向いた。

大和は目を見張った。他の六人も同じように驚いて声も出なかった。振り向いた男があまりにも美しかったから。

男の年齢は大和と同じか、少し年上くらいだろうか。肩まで伸びた白銀の髪が夜風に吹かれて靡いている。肌は新雪のように白く透き通っている。そして白銀の髪とは対照的な、月を思わせるような金色の瞳が輝いている。どこか儂げで浮世離れた絶世の美男がそこに立っていた。

（まるで研ぎ澄まされた刃のようだ……）

大和は自分でもなぜそう思ったのかはよく分からないが、目の前の男の美しさについてそんな感想を抱いた。仕事柄いわゆるイケメンと呼ばれる人達と仕事をしているし、大和自身も仲間のIDOLiSH7メンバーも世間からはイケメンとして扱われる。つまり大和を含めIDOLiSH7全員、イケメンを見慣れている。だが目の前の男は、そんなイケメン慣れしているメンバー全員を驚かせる程の美貌を持っていた。

男は声も出せずにいるIDOLiSH7を見て、おもしろそうに笑っていた。

「おっ、お前さん達が『あいどろっしゅせぶん』って奴らか？ お前さん達の『まねーじゃー』に会いたいんだが……」

男の言葉に、IDOLISH7のメンバー達は顔を見合わせた。彼らのマネージャーとは紡のことだ。いつもなら彼女はIDOLISH7と一緒に行動しているのだが、今日は別の用事があるらしく、彼らとは別行動だった。だから彼女は今この場にはいない。男は彼女に用があるという。紡にどんな用事があるというのだろうか。それに……

「……なんでうちのマネージャーに会うために、俺達の寮に来たんですか？」

大和が男に尋ねる。IDOLISH7のマネージャーに会いたいなら、小鳥遊事務所に直接向かえば良い。マネージャーに会いたいからと、そのマネージャーが担当するアイドルの寮を訪問するというのは不自然過ぎる。

「ある……じゃなかった。あの子はお前達と一緒にいることが多いからな。事務所で待つより、こつちで待つ方が早いかと思ったが……。どうやら一緒にはいないようだな」

男はそう言つて頭を掻いた。男の言い方からして、この男は紡のことをよく知っている。さらに言えば、男は紡に仕事関係の用事がある訳でもなさそうだ。一体、この男は何者なのか……？

「失礼ですが、あなたと彼女の関係は何でしょうか？」

耐え切れなくなった陸が男に尋ねると、男はにやりと笑った。

「恋人」

「えっ……」

男は短く答えた。陸はその答えに目を丸くして動揺していた。それは大和も他のメンバーも同じだった。

紡に恋人がいるなんて聞いたことがない。彼女の恋愛事情を詳しく知っている訳ではないし、そもそも彼女とそういつた話をすることもなかった。だから自分達が知らなかっただけで、本当は恋人がいるのかもしれない。だが彼女に男の気配なんて微塵も感じなかった。

「いいね。その驚いた顔！ 人生に驚きは必要さ。でないとい心が先に死んでいくからな」

男はIDOLISH7の様子を見て楽しそうに笑った。……何だか先程から、この男に振り回されている気がする。大和はこの男のペースに呑まれていることを感じた。

「嘘だと思ふなら、彼女に確認してみるといい。お前さん達は彼女の連絡先くらい知っているんだろう？」『鶴丸が来た』と言えば、彼女は分かるはずさ」

さつきから思うが、この男の話し方はどこか馴れ馴れしい。少し腹が立つ気もするが男の言うことも尤もなので、大和はスマホを取り出してラビチャで彼女に連絡をした。

——鶴丸（？）っていう奴が寮に来ているんだけど、マネージャー知らない？

そう打ち込んで送信する。少し時間が経つと、彼女から返信が来た。

——その人は私の知人です。今用事が終わったので、すぐにそちらに向かいますね。

「どうやら彼女は男（鶴丸という名前らしい）のことを知っているようだ。他のメンバーにもそう伝えると、壮五が鶴丸に申し出た。」

「彼女が来るまで少し時間があります。外で待つてもらおうのも申し訳ないですから、寮の中で彼女を待ちますか？」

壮五の申し出に鶴丸は

「それはいいな！ それでは上がらせてもらおうか！」
と無邪気に笑った。

I D O L I S H 7 は鶴丸を寮のリビングに案内した。人当たりの良い壮五が鶴丸にお茶を出す。

「ああ、ありがとな！」

鶴丸は壮五に礼を言うと、コップを掴む。その何気ない仕草からも、彼の気品が溢れ出ている。完璧な美しき。壮五が鶴丸を見て思ったのは、そんな言葉だった。

「ミスター・ツルマルは、モデルの仕事でもしているのですか？」

鶴丸に問いかけたのはナギだ。鶴丸はきよとした顔でナギを見ている。

「どうしてそう思うんだ？」

「アナタはとても美しいです。ですからワタシ達のように、芸能関係のお仕事をしてい

るのではと」

ナギの言葉を聞いた鶴丸は、にこやかに笑って否定した。

「俺はそんなんじゃないさ。『もでる』なんて仕事も、お前達のように芸能界で人前に出るような仕事、俺は一切してないぜ。ま、美しいって褒められるのは嬉しいことだな」
これには壮五も驚いた。これだけ優れた容姿なら引く手数多だろうに。町中を歩いていたら絶対にスカウトされる。

「じゃあ、ツルさんは何の仕事をしているの？」

初対面の相手にさっそく独特なあだ名をつけた環は、ゆったりとした口調で尋ねる。すると鶴丸は一瞬だけ顔を強張らせ、すぐに笑って答える。

「……役人みたいなものさ」

壮五は鶴丸の答えに違和感を覚えた。鶴丸は何かを隠している。壮五の直感がそのように告げた。

「……胡散臭い方ですね」

一織がぼそつと呟いた。「失礼だよ」と言いたいところではあるが、壮五も一織と同じく鶴丸に胡散臭さを感じた。鶴丸の容姿、振る舞い全てが完璧で、どこか作り物のように思える。それが余計に鶴丸の不自然さを際立たせる。

「胡散臭いだなんて心外だな。俺はお前さん達の質問にきちんと答えたというのに」

鶴丸はやれやれとばかりに肩を竦めて見せる。飄々としていて掴み所がない。そんな鶴丸に一織がさらに何か言おうとしたが、それはインターホンの音によって遮られる。

「おつ、マネージャーが来たみたいだぜ」

三月が玄関へ歩いて行く。玄関のドアが開く音がして、女性の声が聞こえる。

「すみません！ 遅くなりました」

リビングに彼らのマネージャー・紡が駆け込んできた。

「ああ、君待ちくたびれたぞ！」

鶴丸は彼女の姿を見つけると、嬉しそうに駆け寄った。そんな鶴丸を彼女はキッと睨みつけた。

「ちよつと鶴丸さん！ 何でIDOLISH7の寮に来るの☒ いつも悪戯よりびつくりしたよ！」

彼女の様子を見たIDOLISH7のメンバーは少々驚いていた。父親である社長以外の人に対して、ここまで気軽に話す彼女の姿を彼らは見たことがなかった。どうやら彼女は鶴丸とかなり親しい仲のようだ。

「君が驚いてくれるなら、これからもちよくちよく寮にお邪魔するでしょうか」

鶴丸が冗談交じりに言う。

「やめてよ……大和さんから鶴丸さんが来ているって連絡が入った時、心底驚いたんだから……皆さんにもご迷惑をお掛けして……。皆さん、すみません。鶴丸さんには後できつく言っておきますから」

紡は申し訳なさそうな顔をしながら、IDOLiSH7に向かつて頭を下げた。

「おいおい、せつかく迎えに来たというのに説教とか無いだろう?」

「勝手なことをしたから当然でしょ。ところで……そのスーツどうしたの? 鶴丸さん、スーツ持っていないかったよね?」

「あ、これか? これは光坊に借りたんだ。似合っているだろう?」

「燭台切さんの……確かに、いつもの恰好で来られたら、目立つ容姿がさらに目立って大変だけど……サイズ、よく合ったね」

「おい、それはどういうことだ? 確かに俺は光坊と比べて細身に見えるかもしれないが、そこまで貧相じゃないぜ!」

「別に貧相だなんて言っていないじゃない……」

困ったように笑う紡に、しよんぼりとした様子の鶴丸。話の内容は理解できない所もあるが、息の合った二人だということはこちらにも伝わった。

「あの……マネージャー、一つだけ聞いてもいい?」

息ぴったりの二人の間に入るかのように、陸が戸惑いを隠せないまま彼女に尋ねた。

「その……鶴丸さんとは、恋人なの？」

陸の言葉を聞いた彼女は眉を顰めた。そして鶴丸に尋ねた。

「ねえ鶴丸さん。あなた、皆さんに何を吹き込んだの？」

すると鶴丸はあつけらんとした様子で答えた。

「俺と君は恋仲だつて言っただけだが？」

すると紡は呆れたとばかりに大きく溜息をついた。

「……いつからあなたと私は恋仲になったの？」

「おや、冷たいなあ。二人で熱い夜を過ごしたこともあつたというのに……」

「過ごしてない！ ああ、皆さん。この人は人を驚かせることを生きがいとしているの

で、時々凄い冗談を言うことがあります。聞き流してください」

紡はそう言った。どうやら鶴丸の恋人発言は冗談だったらしい。……では鶴丸と紡

の関係は何だというのか？

誰もがそんな疑問を抱いていた時、鶴丸が思い出したとばかりに「あつ！」と声を上

げた。

「もうこんな時間じゃないか！ 早く帰らなくてはな！」

そう言つて鶴丸は紡をひよいつと抱きかかえた。いわゆる「お姫様だっこ」である。

抱きかかえられた紡は「鶴丸さん！」と咎めるように彼の名前を呼んだ。

「私、まだ仕事が……」

「君はもう少し『休む』ということを感じた方がいいと思うぞ」

結月は抱えられたまま鶴丸に抗議をするが、鶴丸は軽くあしらう。そしてIDOL i SH7のメンバーに笑いかけた。

「それではこれで失礼するでしょう！ 『あいどりっしゅせぶん』、またどこかで会おう
！」

そう言うと、鶴丸は彼女を抱えたまま寮を飛び出してしまった。

突然取り残されてしまったIDOL i SH7は暫く呆然としていた。

「まるで、嵐のような人だったね……」

壮五の呟きに、メンバー全員が深く頷いた。

「あれ、ナギっち？ どうしたの？」

環がナギに声をかけていた。その声に釣られて、壮五はナギを見た。ナギは険しい顔で、鶴丸が去った方向を睨んでいた。

「あのツルマルという男……只者ではありません」

いつになく真剣な様子でナギは言った。

「確かに、四葉さんに職業を訊かれた時に少し躊躇う素振りを見せるなど、妙に怪しい所

がある人でしたが……」

「その指摘は間違つてはいませんが、イオリ。しかし、ワタシが気になったのは別のことで
す」

ナギは一織の指摘に対して、そう返した。その意味がよく分からない他の者の代表、
陸がナギに質問する。

「他に何が気になったの、ナギ？」

するとナギは眉間に皺を作りながら答えた。

「ツルマルの手に、胼胝ができていました。ペンによつてできたものではありません。
あれは武道……おそらく剣を握っている内にできたものでしょう。それに、あの隙の無
い身のこなし……間違いなく、彼は武術に長けた人でしょう」

「でも、それなら剣道を習つていたつていう可能性もあるんじゃないか？」

三月はそう意見するが、ナギは首を振った。

「ワタシもその可能性を考えていました。でももう一つ、気になったことがあります」
ナギの真剣な口調に、六人は飲み込まれていく。妙な緊張感が辺りに広がっていく。
「ツルマルから、物騒な気配を感じました。ワタシの直感でしかありませんが、ツルマル
は普通ではありません。あれは、戦闘経験がある男ではないかと」

ナギの言葉に、ある不安を抱いた陸が強く問いかけた。

「じゃあ、あの鶴丸さんと何か関係があるマナージャーは、大丈夫なのな……?」

ナギと陸以外の男達はハツとして互いに視線を交わし合う。ナギの直感を信じるなら、鶴丸は只者ではない。では、そんな鶴丸と親しい仲であるらしい紡は大丈夫なのかと。ナギは重たげにその口を開いた。

「……皆さんには黙っていました、ワタシはマナージャーに初めて会った時から、彼女に不穏な空気が漂っていることを感じていました」

ナギの告白に、六人の間で衝撃が走った。いつもは最年長として冷静な態度がとれる大和も、動揺を隠しきれていない。

「で、でも、マナージャーは、俺達のマナージャーということを除けば、どこからどう見ても普通の女の子だ。あの鶴丸っていう奴とは違って怪しい所は何も……」

「ノー、ヤマト。ワタシが言いたいことは、そういうことではありません。……そうですね。もつと正確に言えば、マナージャーの周囲の空気が不穏だということです。マナージャー本人は、とても素敵なレディであることは間違いありません。……ですが、彼女の周囲に漂う不穏な空気と同じものを、ツルマルから……いえ、これも正確に言えば『ツルマルの周囲』に漂う空気から感じました」

ナギはそう言うと、大きく息を吐き出した。そして、小さな声で付け加えた。

「マナージャーの周りには、どこかききな臭いものを感じます。……何だか不安です。彼

女が大変なことに巻き込まれている気がするのです……」
ナギの目は不安で揺れていた。

第2話 「深まる謎」

鶴丸という男が寮を尋ねてから一週間後、IDOLiSH7は次のライブに向けて練習を重ねていた。七人は単独で活動もしている。だから七人が揃うということは、ここ最近では珍しくなった。

それでも彼らは「IDOLiSH7」として、仲間達との活動も大事にしていた。全員が仕事の合間を縫って、たとえば仕事で疲れていたとしても可能な限りは、七人揃っての練習の時間を取るのだ。それができるのは、彼らのマネージャーの手腕のおかげでもあるのだが。

ダンスの振り付けを確認して、曲に合わせていく。それを一時間くらい続けた。

「よっし、そろそろ休憩しようぜ」

汗だくになったメンバーに、同じく汗を流している三月が声をかける。他の六人も同意して、タオルで額を拭いたり、水分補給をしたりする。全員の呼吸が落ち着いた頃、徐々に大和がこんな質問をした。

「なあ、お前ら。うちの事務所に、水色の髪をした金色の瞳の男っていたか？」

唐突過ぎる質問に、六人は首を傾げた。

「いいえ、そんな方を見かけたことはないですけど……突然どうしたんですか？」

壮五が大和に尋ねる。壮五の質問に大和はこう答えた。

「この前、八乙女がドラマ撮影の時に訊いてきたんだよ。マネージャーと一緒に歩く男がいたけど、何者なんだって。八乙女曰く、かなりの美男だったらしいぜ」

その時の八乙女楽の慌てようはおもしろかったが、マネージャーと共にいたという男がどうも気にかかったのだと、大和は言う。確かに楽の話は気になる。鶴丸という男のこともあって、七人は心が騒めき出した。

「あの八乙女さんが言うなら、物凄く綺麗な人なんだろうな……」

陸が呟く。自他ともに認める美男子である楽が美しいと褒めた男。一体どのような人物なのだろうかと想像してみる。

「そういえば」

陸が想像している時、今思い出したとばかりに環が言葉を漏らす。

「何かゆきりんが言ってたんだけどさ、マネージャーが眼帯をしたイケメンと歩いてたって。アイドル候補生としてスカウトされた人なのかって、俺達に訊いてた」

「ああ、僕も訊かれました。千さんと百さんに、小鳥遊事務は新たな候補生をスカウトしているのかと。僕も環君も、そんな人に心当たりは無かったので、知らないと答えまし

た」

環の言葉に、自分も以前そのような質問を先輩アイドルにされたことを思い出した壮五が付け足す。

「マネージャーの仕事を考えれば、有望な人材を集めていくのは当然ですが……」

一織は考え過ぎだろうと言う。鶴丸は怪しさしか感じ取れなかったが、TRIGGE RやRe:Valeが見たという男達が鶴丸と同じような人間がどうかは分からない。それもそうかもしれないと、他の者達は一先ずそれで納得しようとした。

「皆さん、お疲れ様です」

レッスナールームに女性の高い声が響く。心臓が止まりそうになりながら、彼らはこちらに声をかけた女性を見た。

「……どうかしましたか?」

紡は彼らの間に漂う妙な空気を感じ取ったのか、心配そうにする。先程まで話題にしていた人物が現れるというのは、どうも気まずい。本人に訊いてみれば一番早い解決策なのだが、何となく訊くのは躊躇われる。

「い、いいや! 何でもないぜ! それで、マネージャーはどうしたんだ?」

三月が誤魔化した。誤魔化された紡は一瞬だけ不思議そうにしていたが、すぐに用件を思い出す。今後のスケジュールや、ライブの準備、収録や次の新曲の話題……

「マネージャー、一つよろしいですか？」

一通り話し終えた彼女に、ナギが尋ねる。

「ナギさん、どうしましたか？ もしかして、私、説明不足な点が……」

「ノー。マネージャーの説明はとても分かりやすいです。ワタシ達がこうして活躍できるのも、あなたのおかげです」

ナギは王子様のような微笑みを紡に向けた。だが、一呼吸おいてから真剣な顔で、彼女の顔を覗き込む。

「最近、疲れているのではありませんか？ 目の下に隈ができていますよ」

覗き込まれた紡は顔を赤くしたが、ナギの指摘を受けて慌てる。

「隈できていましたか……それに、そんなに分かりやすく疲れていたんですね、私」

「大丈夫ですよ、マネージャー。あなたはいつもワタシ達のために頑張ってくださいっています。ですが、無理は禁物です」

ナギがウインクをする。紡は少し恥ずかしそうにしながらも、ありがとうございますと言う。

「それでは、私は戻ります。皆さんも、無理のない範囲で練習を続けてください」

そう言って、彼女はレッスルームから立ち去っていた。

「ナギ、よくマネージャーが疲れているって気付いたね」

陸が感心している様子で言う。他のメンバーも彼女の疲れを察知できなかつたため、ナギの観察力に驚いている。

「……ツムギは大分疲れているようです。あの鶴丸という男と会った日の前後から、彼女の疲労が溜まってきている気がします。……女性のプライベートを詮索するのは好きではありませんが、ツムギのこと、やはり心配です」

ナギの言葉に、全員が俯いた。何か嫌な予感が背後から忍び寄ってくるような気がした。

第3話「襲撃者と守護者」

その日の夜、レッスンを終えたIDOLISH7は自分達の寮に帰っていた。いつもは会話が絶えない七人だが、今日は無言だった。紡と、その周囲に現れた自分達も知らない男達。それが何故か彼らの心を不安にさせた。

一織は大したことないだろうと、メンバーには言ったが、内心ではナギの言うことも当たっているのではないかと思っていた。紡のマネージャーとしての手腕は一織も認めていた。だから心配ないだろうと、一織は彼女を信頼するが故にそのように考えた。だが、この一週間で突然見え出した謎の男達の気配について、偶然とは思えなかった。紡の性格上、男遊びなどしないはずだ。だとすれば仕事関係だろうか、だが芸能関係なら自分達も見かけたりするはずだ。

そんなことをモヤモヤと考えていると、寮が見え始めた。三月が鍵穴に鍵を差し込む。そのままドアを開けようとした。

「開けてはいけません！」

その時、鋭い叫び声が聞えた。紡だ。三月にそう叫んだ紡は、鶴丸と共に焦った様子で走ってくる。驚いた三月はドアノブから手を離し、一步後ろに下がった。

「お前ら、そこから逃げろ！」

鶴丸の怒声に驚き狼狽えた彼らは、言われるままにドアから距離を取る。

その瞬間、ドアが内側から凄まじい力で破壊された。その音に心臓が飛び出そうになる。だが、ドアを破壊したであろう「それ」を見て、全身が凍り付いた。

「それ」は人のような姿をしていた。闇のように黒い肌に、大柄な身体。その身体を包む頑丈そうな鎧。鬼の角のようなものが生えた兜。赤黒くぎらぎらと光る目。その手に握っているのは、大柄な「それ」と同じくらいに大振りで、不気味な輝きを放つ刀。

「あ、あ……」

七人は声を震わせる。全員の本能が訴える。負ける。死ぬ。どう足掻いても勝ち目など無い。逃げなければ。でも身体が動かない。無理だ。あの刀に切り裂かれて、自分達は……

「おい、何をしている！ 早く逃げるぞ！ ついて来い！」

その声で我に返った彼らは、弾かれたかのように走り出した。

七人が逃げ込んだ先は公園だった。誰もいない静かな夜の公園で、七人の荒い息遣いだけが聞こえる。一織は恐怖で震えながらも、疑問を紡にぶつけようとする。あれは一体何なのか。なぜ自分達の寮にいたのか。どうして彼女達は自分達の危険が分かった

のか。鶴丸は何者で、なぜこんな非常事態の時でも一緒にいるのか。

「お前達、大丈夫か？ 俺達がいなかったら、今頃どうなっていたことやら……」

「でも間に合って良かった。……皆さんには怖い思いをさせてしまいました」

鶴丸はスーツのジャケットを整えながら、やれやれと首を振っていた。紡はほつと胸を撫で下ろしている。だが、二人はすぐに真剣な表情を浮かべた。

「……まだ向こうは諦めちゃいないみたいだが」

鶴丸の視線の先には寮にいた化け物が、こちらを凝視していた。

「う、嘘……」

陸が絶望したような声を漏らす。他の者達も同じ気持ちだった。こんなにも走ったのに、まだ追いかけていた。もう走る体力は無い。今度こそ——

「おいおい、今から諦めるなんて早すぎるぜ。何のために俺達が来たと思っているんだ」

鶴丸はそう言うと、紡を見つめた。彼女は頷く。

「鶴丸さん、今回は慣れない現代、しかも夜戦……あなたにとつては厳しい環境だということも分かっている。でも本丸からの援軍が来るには、もう少し時間がかかる。……お願い。時間を稼いで」

「主、俺を甘くみてもらったら困るぜ。確かに夜戦は短刀に比べたら不得意だが、それは向こうの大太刀も一緒だ。それなら、俺の方が上だ。存分に暴れさせてもらうぜ」

鶴丸は不敵な笑みを浮かべた。七人には分からなかった。あんな化け物と対峙して、どうしてそんな笑みを浮かべられるのか、分からなかった。そして、そんな鶴丸を信頼している様子の紡のことも。アイドル達の戸惑いも恐怖も拭うかのように、自信にと信頼に満ちた声で彼女は鶴丸に言う。

「では鶴丸国永。あなたの力、存分に見せて！ 彼らを守つて……！」

紡がそう言うと、鶴丸は左手を伸ばす。そうすると光が集まって、日本刀が鶴丸の左手に現れた。その刀を右手で抜き放つ。その瞬間、冬にはあり得ないはずの桜の花びらが鶴丸の身体を覆い尽くす。その花びらの中から、白い着物に金の装飾、甲冑を身に着けた男が現れる。その姿は神々しくて、思わず見惚れてしまう。鶴丸の手に握られていた刀は、化け物と同じ刀——命を奪うものであるはずなのに、その白銀の輝きは清らかで美しかった。

「鶴丸国永、参る——！」